すごい自分だめな自分の研究

三浦朱門

青春愛蔵版

青春出版社

著者紹介

作家。大正15年東京で生まれた。東大言語学科を卒業後，日大芸術学部の教職に就くとともに作家活動に入る。みずみずしい才筆と鋭い洞察力をもって遠藤周作，吉行淳之介らとともに第三の新人として文壇に登場，以後独自の地位を築くに至った。代表作に，中国西域を扱った「冥府山水図」「長すぎた青春」から現代の社会生活，家庭生活など人間の関係を扱った「箱庭」「犠牲」など多数ある。またユーモアとエスプリを生かし「愛からの出発」「女性はたべられない」（いずれも当社刊）などのベストセラーを生んだ。

すごい自分だめな自分の研究

著者　三浦朱門
発行者　小沢和一

検印を廃す

発行所　株式会社　青春出版社
〒162　東京都新宿区若松町73番地
振替番号東京九八六〇二番
TEL（203）五一二一～九

★この本をお読みになったご意見ご感想を編集部までお寄せ頂ければ幸いです。

印刷・堀内印刷　製本・大口製本

0000-206300-3822

© PUBLISHING SEISHUN Co., Ltd. 1974

すごい自分だめな自分の研究

三浦朱門

青春出版社

まえがき

青春というと、華やかで楽しい時代であるかのように思われているし、字から見た限りではそんな印象を受ける人も多いと思う。しかし私に関する限り、青春とは飢えの時代だった。

一つには時代も悪かったと思う。一九二六年にうまれた私は一九四五年の敗戦の時に、十九歳で兵士であった。その前の二三年の学校というのは、私たちに特定のイデオロギーを注入し、型にはめようとするばかりで息苦しく、私はしばしば学校の処分の対象になった。また敗戦後の日本社会は占領下にあって、国民全体が捕虜になったようなものだから、物質的な窮乏とあいまって、華やかだったり楽しかったりできる社会状況ではなかった。

しかし、そういう社会状況を別にしてもなお、青春というものが、それほどすばらしい時だとは思われない。

ハイティーンというのが青春のはじまりであろう。その年の若者たちは今では受験勉強をするか、金のためという以外の、何の意味も見出し得ない労働に従事している。思いきり走りま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

わりたいのに、機械や机の前に、じっとうずくまっているより仕方がない。二十歳になって、いくらか仕事にもなれ、あるいは大学に入ったらよいかというと、そうは問屋がおろさない。金がない。金がないと、遊ぶこともできない。スカッとした服装もととのえられない。当然、女の子などハナもひっかけてくれない。それなのに、バイトで深夜のバーでボーイの見習いなどすれば、じじいどもが、金に物を言わせて、若く美しい女の体をおもちゃにしているのを目のあたりに見せつけられる。

敗戦後三年ばかりして、黒沢明監督の作品ではなかったかと思うのだが、「すばらしい日曜日」というのがあった。すばらしいというのは逆説で、実はみじめな日曜である。金のないアベックがいて、二人は街へ行くと、貧しいが故に、あらゆる楽しみから疎外されていることを思い知らされる。心を傷つけられ疲れきって二人は男の下宿に帰ってくる。男はいらだっており、挫折感に負けそうになっている。それをはね返そうとして、恋人をおかそうとする。彼女はそういう形で性的関係に逃避するのは、あまりにもみじめだと拒否する。そして……といった映画であった。

私は大体、この映画に共感したが、映画の中の「彼」は、すくなくとも自分の部屋に遊びに来てくれる「彼女」がいることがうらやましかった。それだけで、逆説でも何でもなく、文字

通りの意味で、「すばらしい日曜」だと思った。そのころの私に金がなかったこと、その当然の結果としてみすぼらしい服装をしていたという理由だけで、女性から相手にされなかったのではあるまい。それよりも私の心が貧しく、飢えていて、まるでノラ犬のように、弱虫なくせしてまわり中に敵意をまき散らしていたから、誰もよりつかなかったのだ。また、私は時としてはかなりもてていたのに、それにも気付かない愚か者であった。

あるバーのホステスは、私のような貧乏人のくる所ではないと説教しながら、ひそかによそのテーブルから持ってきたビールを飲ましてくれた。私は屈辱をおぼえて、二度とその店に行かなかった。またあるホステスは深夜、私の家までついてきた。私はタクシー代などないから、二人は駅から十何分か、テクテク歩いてきたのである。私は彼女を誘うこともせず、門の前で、「じゃ、サヨナラ」と別れてしまった。何日かして、彼女のアパートが近くにあると聞かされていたので遊びに行こうとして、そんなアパートのないことを知った。私は彼女にだまされ、からかわれたと思い、彼女の店へは二度と行かなかった。

女性ばかりではない。仕事の面でも、自分の未来についても、何の自信も持てないために、何から何まで悲観的に考えるようになった。女にはもてない。おれは能力がない。従って自分の未来はロクなものにはならない。

それでも私は若かったから、毎朝、目がさめる時は、今日こそすばらしいことがある、と期待した。そして、夜寝る時、今日もまた空しかった、と思うのだった。このようにして、毎日、毎日が、何の事件もなく、何の厚みもなく、昨日の上に積み重なるということ――つまり私が何の進歩もせずに日がたってしまうこと――にあせり、悩み、もがいた。そして、青春がすばらしく、美しい時代だなどとは、一生、言うまいと思った。

私は今も、当時の空虚感やあせり、肉体と心の飢えを、ありありと思いうかべることができる。それは主観的にはみじめな状態であった。しかし、五十に手が届こうとする今になってみると、やはり青春はすばらしかったと思わざるを得ない。飢えとは激しい欲望のある証拠だし、空虚感は、満たされようという強い憧れがあるからだ。その荒々しさ、激しさこそが、老人の持たない、青春の特権であると思う。

その荒々しさ、激しさの前では、生半可（ナマハンカ）な金や生活や性の充足など問題にもならない。かえって自己嫌悪の種になるばかりである。私に親切にしてくれた女性たちを、かえって恨んだり憎んだりしたのもその一例である。大きすぎる夢の前では、あらゆる現実が卑小に見える。それは同時に、自己をも含めた現実を批判することでもある。青春とはそのような時代なのだ。自己をいじめ、現実に反抗し、それらのあるべき姿を求めてもがく。それが青春の苦悩だ。私

は自分の青春を思う時、その悲惨な思い出にもかかわらず、今、青春の渦中にある若い人々を祝福せずにはいられないのである。

三浦朱門

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

まえがき 3

プロローグ 自分は一体何を求めて生きているか 17

一人の自分の可能性 17
しがない仕事に一生従事する心細さ 20
自分の心の中にある表と底 23
自分にないものへの願望 27
自分の必要によって変わる愛 32
何によって生きているか 35

1 おれという人間の最初の別れ道 39

おれという一人の人間の世界 39
そこにどんな生き方があるか 42
将来に決意をせまられるとき 45

2 自分の中の切実な問い 49

そこに待っている自分の人生 49

自分の能力を活かしていった二人の方法 52
学歴は自分に何を保証するのか 56
母親がいないと辞表が出せない 60
大学を出ればどんな能力が出せるのか 64
大学出の神話は色あせつつある 67
自分の何が本当の自信になるか 70

3 自分を傷つけているものの正体 73

あんなヤツさえいなければの関係 73
同じ弱味を持ったものの親近感 75
その根底にうごめくライバル意識 78

4 すべての人は嫉妬に苦しんでいる 81

欲求を満たすための情熱や意欲 81
嫉妬の感情はどう現われるか 84
嫉妬を乗りこえた人は強くなる 87

5 自分を蔑視する相手の存在 91
人間一人々々にどんな違いがあるか 91
思い込んでしまった自分の〝ひがみ〟 94
自分独自の価値観 97
自分自身を苦しめている偏見 100
6 行動の原理〝義理と人情〟 103
欲求不満の自己認識 103
〝リクツじゃねえ〟行動の原理 106
人情の陰にひしめいている嘘 110
〝人生リクツ通りにゃいかんのさ〟 113
7 自分の重心をかけていく対象 116
仕事は遊びのためにあるのか 116
仕事と遊びの微妙な関係 119
ポキンと折れてしまう生活 122

8 彼女の実体を知るべきである 126
よそよそしくされるのは気がある証拠 126
幻影にとりつかれて対象を誤った男 129
イメージと関係ない彼女の実体 132
そのためにならメチャメチャでいい 134
9 結婚の中の男と女の本能 139
男は性的に欲求不満な状態にある 139
女はまろやかさ、男は強烈さを求める 141
娘の前に立ちはだかる性 144
オトコとオスの両方に分かれる夫 147
10 見栄だってこんなに必要なのだ 150
「ションベンがいけなけりゃオシッコだ」 150
食わずともワイシャツを洗うのは 153
見栄と犠牲をはかりにかけて見れば 155

11 挫折の大きい人ほど嘘が必要になる 158
だますヤツとだまされるヤツどっちがバカか 158
嘘を適当にまぜるとアクセサリーになる 161
嘘のツケがたまってくると悲劇がおこる 164
12 自分を支配している最も強い本能 167
本能だけでは生きられない人間 167
閉じこめられた可哀そうな人間 170
豚のような女が天女に見える状態 173
13 性に支配された男の行動 177
男の中の衝動意識 177
想像力によって敏感に反応する男 180
人間はエッチですべておかしい 184
14 近親相姦を禁じた掟の意味 188

近親憎悪で殺しあいを続けてきた人間 188
自分の娘に求婚したアラブの首長 191
社会の掟の前にたじろぐ人倫 193
不倫という言葉は便宜でしかない 196

15 人が心の底に求めている願望 199

男と女の妄想には大きな差がある 199
尊敬の念を抱かせる名誉の判断 202
与えられたものは奪われる可能性がある 205
自分が他から劣っていない確認 209

16 ふやけてしまう自我との対峙 212

愚かさが危険を冒すとき 212
勇気ある行為の原理 215
自分の醜悪さを直視する勇気 219

17 死の自覚とはいかに生きるかである 222

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.